

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）  
 大学院生研究  
 2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	英米文学	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程1年		小椋 道晃 印			
指導教員	所属・職名		氏名			
	文学研究科教授		舌津 智之 印			
自然・人文・社会の別	人文		個人・共同の別	個人		
研究課題名	ハーマン・メルヴィルの文学作品と十九世紀アメリカ文化との接点を読み解くこと。					
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程1年		小椋 道晃			
研究期間	2010 年度					
研究経費	200 千円					

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度は、『白鯨』以降に書かれたハーマン・メルヴィルの作品に焦点を絞り、奴隷制問題に対する関心の高まりと南北戦争前期という、政治的にも文化的にも不安定な状態であったアメリカ国家のなかで、作家の言語的戦略を明らかにし、今後のメルヴィル研究の土台を作ることを目標とした。具体的には、これまで人種の観点から論及されることのなかった短編「コケッココー！」において、同時代の人種と奴隷制の問題に由来する表象を抽出し、ジェンダーとセクシュアリティの問題系と結びつけることと、また、長編『ピエール』における主人公が継承する規範を逸脱するクイアな欲望について検討することである。以上の観点からアプローチすることにより、テキストがいかにかつ複層的に構築されているかを考察し、メルヴィルが同時代の社会的要請に対して懐疑的な視点を暗示的に描きこんでいることを提示する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ ハーマン・メルヴィル ] [ 人種 ] [ セクシュアリティ ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

ハーマン・メルヴィル研究に関しては、長編である『白鯨』と『ピエール』、短編「コケッコー！」を取り上げ、南北戦争前期におけるアメリカの政治的問題と文化との関係性のなかで作品を論じることによって、作家個人の問題意識を抽出することができた点で、一定の成果を上げることができた。さらに、メルヴィルからの影響を強く受けたと考えられる 20 世紀の劇作家テネシー・ウィリアムズ的一幕劇について考察を行なうことができ、人種とセクシュアリティの問題系についても深化させることができた。

まずは、7月3日に行なわれた立教大学の英米文学研究方法論Ⅱという授業内発表において、「『アメリカ』を幻視する—『コケッコー!』における分裂する語り手」というタイトルで発表をおこなった。この短編はメルヴィル作品のなかでもあまり扱われることのないマイナー作品ではあるが、これまで、大まかに分けて、二つの観点から論じられてきた。ひとつは、Sidney P. Moss や Allan Moore Emery などが論じるように、エマソンやソローなどの超絶主義に対するメルヴィルの風刺や皮肉を読み込むものであり、もうひとつは、William B. Dillingham や Phillip Young が考察するところの、作品における“cock”という語が示唆する「男根」をめぐる、セクシュアリティの問題を論じるものである。しかし、発表内において、この短編が、一見ユーモラスな喜劇を装いながらも、奴隷制にまつわるメルヴィルの意識を暗示的に扱った作品であるとみなし、『白鯨』から、その後に書かれる黒人奴隷の反乱を扱った中篇「ベニト・セレーノ」へと通じる主題の連続性を浮かび上がらせることができた。具体的には、テキスト細部における「カラス」や「沼地」といった語の象徴性を同時代の黒人や逃亡奴隷のイメージと結びつけることによって、1850年に新逃亡奴隷法が制定された結果、アメリカ北部と南部の分裂という危機的状況のなかで、テキスト内における南北の地政学的な線引きを曖昧にする力学を浮かび上がらせた。

また、7月24日から27日まで南山大学で行われた NASSS/国際大学院生会議に参加し、最終日における「文学・文化」のシンポジウムにおいて、“Melville’s Ambivalent Attitude toward Nationalism”と題して研究発表をおこなった。ここでは、メルヴィルの傑作である『白鯨』について、テキストにおける「海」の表象が、アメリカの同時代に流行したハドソン・リヴァー派の描く風景画のレトリックと通じることを指摘し、19世紀中葉のアメリカにおけるマニフェスト・ディスティニーに象徴される拡張主義やナショナリズムの高揚に対して、作家がいかに両義的な態度をとっているかを考察した。とりわけ、エイハブの狂気を描く箇所で行われた「キャッツキル山を流れるハドソン川の水量」という比喻から連想されるのは、1825年から南北戦争が始まる頃までに隆盛したアメリカ合衆国初の風景画の一派であるハドソン・リヴァー派である。Thomas Cole や Asher B. Durand といったハドソン・リヴァー派を代表する画家の風景画を例示しながら、美術史家の Barbara Novak や Angela Miller 等の研究を参照し、マニフェスト・ディスティニーとも連動しうる同時代の風景画に込められた愛国的な高揚や先住民を虐殺した歴史の隠蔽と、『白鯨』の海の描写との重なり／差異を読み解くことで、メルヴィルの同時代のナショナリズムへの懐疑的視点を読み解くことができた。また、アメリカの院生との交流や他大の研究者による指摘も受けることができ、今後の研究に有意義な視点を得ることができた。

## 研究成果の概要 つづき

自身の戯曲 *Suddenly Last Summer* (1959) において、メルヴィルの中篇「エンカウンターダス」(1854) を直接引用し、メルヴィルに対する関心、興味、そして強い影響を受けた作家であるテネシー・ウィリアムズ的一幕劇を読むワークショップ(成蹊大学)にて、「*Thank You, Kind Spirit* に見るウィリアムズとホモセクシュアリティ—人種嫌悪と同性愛恐怖の重なり」というタイトルで発表をした。この研究においては、近年出版されたウィリアムズの初期未発表原稿のひとつである *Thank You, Kind Spirit* について、混血とされる女祈祷師マザー・デュークロをめぐる構築される人種的言説とその効果について概観したのち、テキストにおけるさらなる隠蔽によって構造化された、作家ウィリアムズ自身のホモセクシュアリティについて考察した。端的に言えば、権力と言説の効果をめぐるドラマの中に、ウィリアムズは、「秘密」を露呈されることと、「秘密」をパブリックに開示したい欲望と、それによって暴力的排除を受けるかもしれない、という潜在的恐怖を重ねながら、孤独と連帯の逆説のなかにあるマザー・デュークロを描き出したのではないか、というのが本論の趣旨である。結果として、黒人に対する嫌悪と同性愛恐怖とが重なる地点を探ろうとした作家ウィリアムズの意図をこの一幕劇から読み取ることができたと考えられる。

同性愛作家であるテネシー・ウィリアムズのメルヴィル作品に対する強い関心が示唆するように、メルヴィルとセクシュアリティをめぐる研究は、以前から作品の豊かな読みを提示してきた。『白鯨』と並び称されることも多いが、いまだ明確に評価の定まらない作品である『ピエール』もまた、セクシュアリティ研究の観点から注目される作品である。ピエール・グレンディニングという若き主人公の住むサドルメドウズという先祖伝来の土地は、植民地時代にインディアンと勇敢に戦った曾祖父から、アメリカ独立戦争時の英雄であった祖父、そしてピエールの父というように、連続した家系を強調されている。このことから、親族関係の正統性がアメリカ国家の正統性のアレゴリーとなっていることはこれまでの研究によっても指摘されている。そのような先行研究を踏まえた上で、テキストにおいて明示的には語られないグレンディニング家の父祖たちの見えない欲望をめぐる、それがいかに表象されているかを考察し、グレンディニング家の「誇り高い」遺産を放棄するピエールが、実際には、父祖たちの「不気味な欲望」を継承していることを証明すべく、作中の登場人物の関係について、見えない欲望をあぶりだした。本研究は、12月18日に開催された立教英文学会において、「ハーマン・メルヴィルの『ピエール』における語られざる過去」というタイトルで発表をした。通常、この作品における、逸脱した親族関係とは、領土拡張の動きと軌を一にするグレンディニング家に継承されてきた「栄光」に対する批判として考えられているが、しかし、ピエールの逸脱した親密性やセクシュアリティは、必ずしも単純なアンチテーゼにとどまるわけではなく、むしろ、この家系に継承されてきた「クイアな親密性」を、ピエールもまた反復しているのではないか、という仮説を例証することができた。その上で、メルヴィルは、「正統」な家系という規範に対する逸脱を描いたのではなく、規範化される親族の起源においてすでに、その「正統性」自体が脱規範化される可能性を示唆したのだと考えられる。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

#### ① 雑誌論文

- (1) 小椋道晃 「イシュメールの荒れる海—『白鯨』の海に現れる陸のイメージ」  
*Kanazawa English Studies* 第27号、2010年7月、67-81頁

#### 書評

- (2) 小椋道晃 「塚田幸光『シネマとジェンダー—アメリカ映画の性と戦争』(臨川書店)」『英米文学』、立教大学文学部英米文学専修、第71号、2011年3月刊行予定

#### ④ 学会発表

- (1) 小椋道晃 「ハーマン・メルヴィルの『ピエール』における語られざる過去」  
立教英文学会、2010年12月18日、於立教大学
- (2) 小椋道晃 「*Thank You, Kind Spirit*に見るウィリアムズとホモセクシュアリティ—人種嫌悪と同性愛恐怖の重なり」科学研究費・基礎研究(B)  
「モンロー・ドクトリンの行為遂行的効果と21世紀グローバリズムの未来」  
ワークショップ「テネシー・ウィリアムズの新世紀—越境する初期作品の再発見」  
2010年11月22日、於成蹊大学
- (3) Michiaki Ogura. “Melville’s Ambivalent Attitude toward Nationalism”  
NASSS/国際大学院生会議、2010年7月27日、於南山大学

#### ニューズレター

- (4) 小椋道晃 「文学と環境—素朴な疑問から」  
『ASLE-Japan Newsletter』28号、2010年6月